

# 日本語とタイ語の薬学用語の特徴

## — 語種および用語確立のアプローチの観点からの分析 —

後藤寛樹

Characteristics of Japanese and Thai Technical Terms in Pharmaceutical Science:  
An Analysis Based on Word Type and Approaches to Establishment of Terms

GOTO Hiroki

### 要 旨

学術用語の確立は、その分野の知識を定式化するために重要な過程である。ある言語において、従来にはなかった事象や概念の名称を表現しようとする場合、他の言語からの語彙を借用して新たに語彙を作り出すことが多い。その場合の方法としては、当該語彙の意味を自国語に存在する語彙と結び付けて表記する方法 (semantic adoption) と、当該語彙の音声を自国語の音韻・表記体系に当てはめて表記する方法 (phonetic adoption) の2つがあり、どちらの方法をより優先するかは、言語や分野によって異なる。本稿では、日本語とタイ語の薬学用語を語種および用語確立のアプローチという2つの観点から分析した。語種別で見ると、日本語とタイ語の薬学用語は異なる分布を見せるが、用語確立のアプローチの点では、どちらも意味を重視し、共通していることがわかった。

【キーワード】 薬学用語, タイ語, 日本語, semantic adoption, phonetic adoption

### 1 はじめに

学術の世界では、当該分野の学術用語を確立することが、その分野の知識を定式化するために必要な過程である。特に、ある言語において、従来にはなかった事象、概念、事物の名称などを表現する場合には、既にそれらが確立されている言語の語彙を自国語の語彙に置き換えて、新しい語を作り出すことが多い。日本においても、明治期以降、西洋の学問の流入に伴って新しい学術用語が多く作られた。

外国語で表された概念や名称を自国語に取り入れる場合の方策には、当該語彙の意味を自国語に翻訳して表記する方法 (semantic adoption, 以下「SA」と呼ぶ) と、当該語彙の音声を自国語の音韻・表記体系に当てはめて表記する方法 (phonetic adoption, 以下「PA」と呼ぶ) があり、どのような方策を取るかは言語や分野によっても異なりを示す。例えば、Matsuda 他 (2008) の研究では、機械工学、コンピュータ科学、建築学の3つの分野の学術用語を日本語、ベトナム語、タイ語の3つの言語間で比較している。言語別に見ると、日本語は分野を問わず3言語の中でPAの率が最も高いこと、ベトナム語はすべての分野でPAの率が極めて低く、約9割の学術用語がSAであること、また、分野別に見ると、コンピュータ科学の学術用語は日本語およびベトナム語でPAの率が他の分野よりも高いことなど、言語や分野による違いが指摘されている。

本稿では、日本語とタイ語の薬学用語を語種および学術用語確立のアプローチの観点から分析し、日本とタイの薬学分野では、学術用語がどのように確立されているのかを見る。

## 2 学術用語の確立の動向と先行研究

日本では明治期以降、西洋の学問の流入に伴って、多くの学術用語が作られてきた。学術用語の確立の目的は、その分野の知識を定式化し、正しく普及させることにあるので、ある用語が使用者によって異なる事象や概念を示したり、同一の事象・概念を表す用語が複数存在するというのは望ましくない。そこで、1942年に文部省によって「学術文献調査特別委員会学術用語制定分科会」が設けられ、学術用語の制定に乗り出した（東1990）。その後、文部省とさまざまな学会との協力で、これまでに31の分野の学術用語集が刊行されている。

学術用語については、国立国語研究所や現在の情報知識学会専門用語研究部会の前身である専門用語研究会によって研究がなされてきた。国立国語研究所（1981）には、専門用語をどのように規定するか、現代語における専門用語の特徴などについての記述がある。また、学術用語の国際比較として、日本語の専門用語と英語、ヨーロッパ諸語、中国語の専門用語を比較し、その難易度の差<sup>1)</sup>や用語の国際性などについても述べられている。専門用語研究会においても、1990年から2000年にかけて、さまざまな観点からのアプローチによる学術用語の研究が進められている。

これ以外に、Matsuda 他（2008）の研究では、工学系の学術用語を日本語、ベトナム語、タイ語の3言語間で比較し、この3言語の間で学術用語確立のアプローチにどのような違いがあるのか述べている。

学術用語の国際比較は、日本語と英語やヨーロッパ諸語、中国語、韓国語との間で、いろいろな形で行われているが、その他の言語との比較研究は、上述のMatsuda 他（2008）の研究以外にはまだほとんど進められていない状態にある。

## 3 タイ語の語種

日タイ語の薬学用語について見る前に、タイ語の語種について概観しておきたい。

タイは、古くから周辺地域の文化を取り込む形で自国の文化を発展させてきた。東からはクメール文化、西からはインドの古代インド文化、仏教文化を取り入れ、それとともに、クメール語やサンスクリット語、パーリ語から多くの語彙をタイ語に取り入れている。他にも、英語や中国語からの借用語も多く、借用語がタイ語の語彙の約3分の2を占めるとも言われる。中でも、サンスクリット語とパーリ語（インド系言語）からの借用語彙は、タイ語の教養語彙の大部分を占め、タイ語への同化・定着の度合いも高く、日本語における漢語と同様の役割を担っている（坂本1984、富田1997、田中1999、三上2002、Wilailuck 2005）。もちろん、タイでもともと使われてきた固有の純タイ語語彙も存在し、日常的な動作を表す動詞や日常的な普通名詞、身体呼称、親族呼称、基本的な様態を表す形容詞などは、純タイ語の語彙が用いられる（田中1999）。また、日本語には、漢字を組み合わせる新たに作られた漢語（例：科学）や、既存の漢語に新たな意味を付与した漢語（例：自由）のような和製漢語が存在するが、タイ語においても、サンスクリット語やパーリ語を組み合わせる新たに作られた語彙、言わばタイ製インド系語彙が存在する（例：สันติภาพ [sǎnti-phâap]<sup>2)</sup>「平和」、สามัญศึกษา [sǎaman-sùksāa]「普通教育」）。この点でも、インド系借用語の役割は日本語における漢語と同様であると言ってよいだろう。インド系言語以外からの借用語彙には、ถนุ [thanǒn]（クメール語、「通り」）、กอล์ฟ [kǒwɔp]（英語、「ゴルフ」）のようなものがあり、これらは元の言語の綴りや発音に合わせてタイ文字で綴られる。つまり、タイ語の語種には、日本語の和語に相当する純タイ語、日本語の漢語と同様の役割を担うインド系借用語、日本語の外来語に相当するその他の借用語、そしてこれらが混在した混種語の4種類があり、表1に示すように、日本語と似た形で分類できるということになる。日本語とタイ語が異なるのは、タイ語には日本語のひらがな、カタカナ、漢字のような文字の種別がなく、基本的にはすべてタイ文字で綴られるという点である<sup>3)</sup>。また、ここではその他の借用語に含めてはいるが、クメール語からの借用語もタイ語への同化・定着の度合いが高く（Wilailuck 2005）、また、タイ語からの逆輸出もみられる（坂本1984）。

表1 日本語とタイ語の語種

日本語	タイ語
和語	純タイ語
漢語	インド系の借用語
外来語	その他の借用語
混種語	混種語

では、似たような語種のタイプを持つ日本語とタイ語とでは、学術用語確立のアプローチに違いが見られるのだろうか。以下、日タイ語の薬学用語について分析を試みる。

## 4 日タイ語の薬学用語の分析

### 4.1 分析の対象としたデータ

分析の手順としては、まず、タイ王立学士院の編による“ศัพท์เภสัชศาสตร์” [sàp-pheesàtcha-sàat] (『薬学用語』) に掲載された約 3000 の薬学用語をデータベース化し、このうち、日本薬学会編『薬学用語集』にも同様に掲載されている用語を抽出して、分析の対象データを作成した。この 2 冊の用語集は、ともに国が学術用語の標準化を目指して作成したものであるという共通点を持つ。また 2 冊とも、日本語、タイ語に対応する英語の用語、および、英語に対応する日本語、タイ語の用語が掲載されており、両方向から用語を調べられるという点でも共通している。本稿での分析対象データ作成にあたっては、英語のエントリーに対して示された日本語、タイ語の用語を参照した。両者に共通して掲載されていた英語の用語は、657 語<sup>4)</sup>であった。英語の 1 つの用語に対して、例えば、“sub-coating” に対する日本語訳「サブコーティング」、「上げけ」や、“pellets (ペレット剤)” に対するタイ語訳 “ยาเม็ดเล็ก” [yaa-mét-lék], “เพลเลต” [phellét] のように、複数の訳語が存在する場合があります。それらすべてを抽出した結果、日本語は 830 語、タイ語は 790 語の用語が得られた。

### 4.2 分析方法

4.1 で述べた日本語の薬学用語 830 語、タイ語の薬学用語 790 語に対して、語種の情報を付与した。日本語は、和語、漢語、外来語、アルファベット表記語、混種語の 5 つ、タイ語は、純タイ語、インド系借用語、その他の借用語、アルファベット表記語、混種語の 5 つに分類した<sup>5)</sup>。「アルファベット表記語」という分類は、日本語・タイ語のどちらの用語にも TDM (therapeutic drug monitoring) のような頭文字語の用語で、アルファベットのまま表記されたものがあり、このような用語に付与した語種情報である。また、混種語についてはどのような語種の語から構成されているのかも見た。それぞれの語種別の割合を計算し、両言語の薬学用語の語種別分布を調べた。さらに、日本語とタイ語の薬学用語では SA、PA のどちらが多いのかを調べた。

### 4.3 分析結果

日タイ両言語の薬学用語を語種別に見た内訳を示したのが表 2 と表 3 である。この表を見ると、日本語の薬学用語は圧倒的に漢語語彙が多いのに対して、タイ語の薬学用語は純タイ語が約 3 割、混種語が半数強を占め、日本語の漢語と同様の役割を担っているはずのインド系言語からの借用語はわずか 5 % で、非常に数が少ないことがわかる。これには、タイ王立学士院の『薬学用語』編纂の方針が大きく関わっていると考えられる。『薬学用語』巻頭の説明では、「純タイ語に翻訳できる語彙はなるべく純タイ語にし、しかるべき語彙が見つからない場合には現在タイ語の中で用いられているサンスクリット語またはパーリ語の語彙をあてた。それでもなお、用語の意味を示すのに適当な語彙がない場合には訳音をあて

た」と書かれている。学術用語であってもなるべくタイの固有の語彙で表記しようという方針<sup>6)</sup>がこの分布からもうかがえる。

表2 日本語の薬学用語の語種別内訳

語種	語数 (比率)
和語	8 (1.0%)
漢語	615 (74.1%)
外来語	91 (11.0%)
アルファベット表記語	16 (1.9%)
混種語	100 (12.0%)
計	830

表3 タイ語の薬学用語の語種別内訳

語種	語数 (比率)
純タイ語	230 (29.1%)
インド系借用語	40 (5.1%)
その他の借用語	68 (8.6%)
アルファベット表記語	10 (1.3%)
混種語	442 (55.9%)
計	790

日本語の薬学用語のうち、和語は全体の1%と非常に少ない。和語が用いられているのは、「かきませ」「下がけ」のような製薬等の過程での操作を表す語彙や、「ふるい」「へら」のような製薬等で用いられる器具の名称であった。漢語、外来語が用いられている語彙には、さまざまなものが含まれており、特徴的な傾向は見られなかった。

一方、タイ語の薬学用語については、純タイ語の語彙が用いられているのは、**โกร่ง** [kròŋ] (乳鉢)、**พาย** [phaai] (へら) のような道具名、**ยาพ่น** [yaa-phôn]<sup>7)</sup> (スプレー剤)、**ยาเม็ดฟู** [yaa-mét-fûu] (発泡錠) のような形質別の薬剤名、**ยาลดไข้** [yaa-lót-khâi] (下熱薬)、**ยาสีฟัน** [yaa-sii-fan] (歯磨剤) のような用途別の薬剤名などが多かった。インド系借用語語彙には、**เภสัชจลนพลศาสตร์** [pheetsàtcha-calaná-phonla-sàat] (薬物動態学)、**พยาธิสรีรวิทยา** [phayaathí?-sariira-wíthayaa] (病態生理学)、**พันธุวิศวกรรม** [phanthú?-wítsàwa-kam] (遺伝工学)、**ชีวเภสัชกรรม** [chiíwá-pheetsàtcha-kaan] (生物薬剤学) のように学術分野の名称を示すものが多かった。このことは、タイ語の教養語彙の大部分をインド系借用語語彙が占めるという事実とも一致している。また、その他の借用語はすべて英語からの音訳語彙であった。

ここで混種語として分類された用語について見てみたい(表4、表5)。日本語の場合、混種語の用語が占める割合は1割強で少ないが、タイ語は混種語が442語あり、全体の半数以上を占めている。このうち、純タイ語とインド系借用語からなる混種語が274語で、タイ語のデータ全体の34.7%を占め、混種語の形成においてインド系借用語が大きな役割を担っていると言える。

表4 日本語の混種語の内訳

語種	語数 (比率)
和語+漢語	13 (13.0%)
和語+外来語	1 (1.0%)
漢語+外来語	82 (82.0%)
漢語+英語	4 (4.0%)
計	100

表5 タイ語の混種語の内訳

語種	語数 (比率)
純タイ語+インド系	274 (62.0%)
純タイ語+その他	77 (17.4%)
インド系+その他	17 (3.8%)
純タイ語+インド系+その他	74 (16.7%)
計	442

日本語の混種語の大部分を占める漢語と外来語の組み合わせの語彙を詳しく見てみると、「コロジオン剤」、「コリン薬」のように「～剤」、「～薬」という形の薬剤名の語彙が多かった。和語と漢語の組み合わせの語彙についても、半数が薬剤に関する名称であった。

タイ語の混種語については、純タイ語とインド系借用語の組み合わせの語彙には、日本語と同様に薬

剤名に関する語が多かった。次に多い純タイ語とその他の借用語の組み合わせの語彙には、薬剤名のほかに物質名も多く見られた。純タイ語、インド系借用語、その他の借用語からなる複雑な組み合わせの語彙については、共通した傾向は見られなかった。また、混種語ではない場合のその他の借用語がすべて英語から音訳した語彙であったのに対し、混種語に含まれるその他の借用語には、クメール語からの借用語が多く含まれていた。

ここまで語種別に見てきたところでは、日本語とタイ語とでは分布の様子が異なっていたが、これを学術用語確立のアプローチ、すなわち意味を優先するSAが多いのか、音を優先するPAが多いのかという観点から見てみよう。4.2でふれたTDMのような語彙は、英語の頭文字をそのまま採用しているだけなので、これを含む語彙はここでは分析対象から除外する。日本語の場合、和語および漢語で示された語彙は、その事象や概念の意味を元にして、該当する日本語の語彙を当てはめたものであり、SAによってできた語彙であると考えることができる。一方、外来語で示された語彙は、すべてカタカナ表記の語彙であり、これは元になる外国語の音声を日本語の音韻・表記体系に当てはめて表したものである。PAによってできた語彙となる。同様に、タイ語の場合も、純タイ語およびインド系借用語で表された語彙はSAによる語彙、その他の借用語はPAによる語彙となる。混種語を形成するそれぞれの語彙も含めて、このSAかPAかという基準で見直してみると、表6のようになる。3節でふれたように、クメール語からの借用語彙もタイ語への同化・定着の度合いが高く、新しい概念を示す語を作る際などにも積極的に用いられることがある。そこで、タイ語の内訳については、クメール語をその他の借用語の1つとみなした内訳(A)と、インド系借用語と同様に日本語における漢語語彙のような役割を担う語彙とみなした内訳(B)の2つの内訳を示した。

日本語の方がタイ語よりもSA、PAの割合が少し高く、タイ語はSAとPAを併用した形で形成されている語彙が日本語よりも多くなっているが、日タイ語ともにSAの割合が高いという似た傾向を示すことがわかった。

表6 用語の翻訳のされ方に見た薬学用語の内訳

	日本語 語数 (比率)	タイ語 (A) 語数 (比率)	タイ語 (B) 語数 (比率)
SA	636 (78.5%)	544 (69.7%)	591 (75.8%)
PA	91 (11.2%)	68 ( 8.7%)	67 ( 8.5%)
SA+PA	83 (10.2%)	168 (21.5%)	122 (15.6%)
計	810	780	780

## 5 まとめと今後の課題

本稿の分析で以下のようなことがわかった。

- (1) 日本語の薬学用語は、漢語語彙の用語が占める割合が高い。逆に和語はほとんど用いられていない。外来語の占める割合は約1割で、それほど多くはない。
- (2) タイ語の薬学用語は、混種語が半数強を占めている。混種語の中では、純タイ語とインド系借用語の組み合わせが最も多い。混種語以外で多いのは純タイ語の語彙で、これは国家としてなるべく純タイ語の使用を進めようというタイの国としての方針の影響が大きいと考えられる。
- (3) 語種別に見ると、日本語とタイ語の薬学用語の分布は類似性がないように思えるが、用語確立のアプローチの観点で見ると、両言語は比較的似たアプローチの様子を見せている。

本稿では、日タイ語の薬学用語を語種および用語確立のアプローチという2つの観点で見えてきたが、両言語の薬学用語の実態をより詳しく把握するためには、さらにさまざまな点からの検討が必要である。

まずは、日本語における漢語、タイ語におけるインド系借用語彙ともに、日本あるいはタイで新たに作られた和製漢語、タイ製インド系借用語があり、日タイ語の薬学用語にこれらの語彙がどれくらい含まれるかという点を調べてみる必要がある。次に、両言語の薬学用語がどれだけ共通する部分を有しているのか、つまり、お互いの薬学用語を知らない日タイの薬学研究者が、他の言語の用語を使うことなくどれだけ理解しあえるかという点である。日本語とタイ語は言語的にも異なるので、共通する部分は少ないことが予測されるが、もし、共通する部分があるとしたら、それはどのような部分か調べてみる必要がある。3番目に、両言語の薬学用語の難易度にはどの程度の差があるのかという点である。それぞれの言語の基本語彙の理解だけでどれくらいの薬学用語が理解できるのか、これも調べてみなければならない。日本語の薬学用語の難易度が把握できれば、日本で薬学を学ぶ留学生がどれくらいの語彙の知識を身につければよいのかという指標が提示できると思われる。4番目に、薬学の研究・教育の現場では実際にどのような語彙が使われているのかという点である。本稿の分析でデータを抽出したのは、日本およびタイで発刊されている学術用語集であるが、薬学分野の入門書、概論書は実際に用語集に掲載された用語を用いて書かれているのか、講義やゼミ、学会などでもそれらの用語が使われているのか、実態を調査する必要がある。その際には、両国の薬学教育の歴史的発展にも目を向ける必要があるだろう。これらの観点を踏まえて分析を続けていきたい。

## 付記

本稿は、科学研究費補助金（若手研究(B)、課題番号：20720137、課題名：薬学分野の学術用語の日タイ対照研究—日タイ英薬学用語辞典の開発を目指して—）の助成を受けて行った研究の一部である。

## 注

- 1) 国立国語研究所(1981)では、難易度の差を求めるために、当該言語の基本語とされる語彙と意味や形の上でどれくらい関係を持っているかという基準を定め、「意味づけ」と呼んでいる。また、この意味づけという基準をもとにして、学術用語と基本語彙の「へだたり度」を求め、へだたり度の高い分野あるいは言語の学術用語は難易度が高いとしている。意味づけ、へだたり度の2つの基準を用いて、日、英、仏、独、露の5言語の間で物理学用語の比較を行った結果は、英、仏、独、露、日の順に基本語彙とのへだたりが大きい（つまり、難易度が高い）としている。
- 2) タイ語の発音表記は、富田(1997)を参照した。
- 3) タイ語の場合は、原則的にすべてタイ文字で綴られるが、純タイ語語彙の綴りには通常使用されない文字が使われたり（インド系言語、クメール語からの借用語彙）、借用元の語彙の綴りや発音に合わせて綴ることによって、タイ語では発音されない文字が現れたりする（インド系言語、クメール語、英語などからの借用語彙）ので、綴りを見ればある程度その語の語種がわかる。
- 4) 実際には、複合語や句も1つの項目として掲載されている場合があるので、「語」というよりも「項目」と呼ぶ方がふさわしいかもしれないが、ここでは便宜上「語」としておく。日本語やタイ語の用語についても同様である。
- 5) タイ語の語種の認定には、富田(1997)を参照した。
- 6) 王立学士院の方針については、富田(1997)にも次のような指摘がある。「タイ国の学士院ではしばしば英語の術語のタイ語訳を制定しており（以下略）」。つまり、タイは国家の政策として、外来語（借用語）としての英語術語の流入を防ぐために、タイ語で術語を制定しようとしているのである。
- 7) 遠古シナ語、古代シナ語の音韻の研究の進展以来、タイ語がそれらの言語と同系である可能性を指摘する研究もある。ここに示した語に含まれる๗1[yaa]についても、遠古シナ語、古代シナ語の「薬」と関連がある可能性もある（富田(1997)に参考情報として示されている）が、同系説については、未だ確固とした説があるわけではなく、借用関係もはっきりしていないので、ここではその関連性は考えないものとする。

## 参考文献

- (1) 国立国語研究所 (1981) 『専門語の諸問題』 国立国語研究所報告 68 (秀英出版)
- (2) 坂本比奈子 (1984) 「タイ語における外来語問題」 『言語生活』 391号, pp.43-45 (筑摩書房)
- (3) 東秀彦 (1990) 「日本工業規格における用語規格」 『専門用語研究』 No.1, pp.5-9 (専門用語研究会)
- (4) 富田竹二郎 (1997) 『タイ日大辞典』 第三版 (めこん)
- (5) 田中寛 (1999) 「タイ語の学術語彙」 『国文学解釈と鑑賞』 64 卷 1号, pp.139-144 (至文堂)
- (6) 日本薬学会 (2000) 『学術用語集 薬学編』 (丸善株式会社)
- (7) 三上直光 (2002) 『タイ語の基礎』 (白水社)
- (8) Wilailuck Tangsirithongchai (2005) 「タイ語における外来語および外国語起源語」 『NUCB Journal of Language Culture and Communication』 Vol.7, No.2, pp.95-102 (名古屋商科大学)
- (9) Matsuda Makiko, Takahashi Tomoe, Goto Hiroki, Hayase Yoshikazu, Nagano Robin Lee, Mikami Yoshiki (2008) “Technical Terminology in Asian Languages: Different Approaches to Adopting Engineering Terms” IJCNLP, The 6th Workshop on Asian Language Resources, pp.25-32
- (10) ราชบัณฑิตยสถาน (タイ王立学士院) (2008) “ศัพท์เภสัชศาสตร์” (『薬学用語』) 第 2 版